The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Cindy Patton, ”Inventing AIDS”, Routledge, 1990
Author(s)	小玉, 章
Citation	年報人間科学. 1993, 14, p. 141-145
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10296
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Cindy Patton

Inventing AIDS

Routledge, 1990

小玉　　章

裏表紙の短い紹介文によれば、本書の著者シンディ・パットンは、アマースト・カレッジで女性学／ジェンダー学の教鞭をとる一方、WHOのアドバイザーでもあり、さらにエイズをめぐる社会運動の権威として広く知られた研究者であるという。本書は、〝エイズ（後天性免疫不全症候群）〟を取り巻く諸言説および諸制度の中で、いかなるものとしてエイズが構成され、人々に認識され、対応策が方向づけられていったかを、多様な観点から批判的に検討したものであり、マス・メディア上に現れる言説から「科学的」と称する研究に用いられる論理・言語・メタファーのあり方までが洗い直しの対象となっている。日本で出版されているエイズ関連の書物は、啓蒙的なものか興味本位のものが多く、エイズについて語る自らの立場や自己の言説を意識的に対象化する姿勢はほとんどみられない。せいぜいパニックの後に、週刊誌等の「騒ぎ過ぎ」を、「もう少し冷静に」と〈科学的／客観的〉な立場から権威主義的に批判する程度である。感染者・患者数の増加にともなって日本においてもエイズ対策や科学的言説の欠陥をめぐる問題が先鋭化することは間違いないが、本書はそうした事態を見通す上での手がかりを提供するものになると思われる。

本書は六章に分かれ、それぞれが一応独立したテーマを探究しているが、エイズ問題の相互依存性・多元決定性を強調する著者の方法を反映して、各章の内容はそれぞれ他を参照することを常に必要としている。本稿ではそれを、エイズ対策とそれを枠づける権力関係、科学的知識が他の知識や援助政策に及ぼす影響、そして言説と

権力といったテーマで再構成し、その三つの問題に対する著者の考えの要約と解説を試みることにしたい。

まずエイズ対策とそれを枠づける権力関係についてであるが、これについては著者による具体的な分析を示すのが最良と思われるので、アメリカにおけるエイズ対策の現状に対する批判的考察を要約することからはじめたい。

八十年代前半にはゲイや麻薬中毒者に対する偏見等によって対策が遅れていたエイズだが、多様な差別反対運動や援助運動の盛り上がりによって、次第に国民全体の緊急課題として認められるようになった。そして八十年代半ば以降になると、ゲイ・コミュニティに基盤をおいた私設非営利の援助組織が、患者のケア、公衆の啓蒙、リスクのある人々への教育等でヘゲモニーを握ることになった（その状況は今も続いている）。著者はこれらの援助組織を〝エイズ・サービス組織（ＡＳＯ）〟と命名する。ＡＳＯは、主にゲイ白人男性のスタッフと中流階級出身の女性ボランティアによって運営され、その資金は連邦政府の財政支出と主にゲイによる寄付によって賄われている。これらの組織は規模の肥大化、官僚制化、厳格な役割分化（エキスパート／ボランティア／〝犠牲者〟という排他的な分化）の傾向を強め、連邦行政機関と性格的に類似した硬直的なものになりつつあるという。著者はこうしたＡＳＯが、階級、人種、セクシャリティの現代的カテゴリーの再組織化、権力関係の再分節化と合理化に貢献しているとして批判を加えるとともに、その背景を分析している。

エイズに対する政府の無策や医療機関の無関心に抗議した多様な草の根運動が、ＡＳＯに収斂していった背景には、エイズを特定のタイプの問題として構成し、制限された一連の解決策や行政構造だけを正当化する隠れた政策仮説と物質的状況があった。ゲイ・コミュニティ側の要因としては、①六十年代以降のゲイ解放運動の成果として、ゲイ・コミュニティにアイデンティティと自律的で高度に分節化されたインフラストラクチャーが存在していた、②ホモセクシャリティの脱医療化の影響により、医療機関や国家の直接介入を受けるよりも自助的な対策が選好されやすかった、③公的便宜や社会福祉プログラムに対するアクセスを持っていなかった、等の点がある。そして行政側には①レーガン保守政権の医療費削減への努力、②社会的・政治的要因よりも個人的要因を重視する公衆衛生モデル、③キリスト教的慈善とボランティア活動にもとづき、政府サービスのコミュニティへの委譲をうながす利他主義のイデオロギー、等の存在があった。こうしたコンテクストの中で、組織の内的スタイルと政府政策の傾向、資金パターン等の外的圧力が噛み合うことで、現在のＡＳＯ主流のエイズ援助構造が形成されたというのである。さらに著者はこの過程でＡＳＯ内部で連邦予算獲得のための戦略変更とコミュニティの出自の隠蔽が行われたことや、そして八十八年前後のエイズをめぐる新しい社会運動が、初期の草の根運動の存在を無視して自らを〝急進的エイズ運動の端緒〟と規定したことを指摘し、これらは過去の運動の歴史の抹殺と伝統の捏造であると批判している。

著者は、ASOのヘゲモニー獲得以前の草の根の援助・教育活動を高く評価する立場を取っており、それがこうした厳しい現状批判につながっているのであるが、以上の分析にみられるように常に歴史的推移を綿密にたどって対策と権力との関係を捉えるという姿勢を堅持しており、感傷的な過去礼賛とは一線を画している。こうした姿勢は、HIVテスト中心の教育プロジェクト、セーフ・セックス指導の混乱等の批判的考察にも一貫して保持されており、評価の妥当性を高めるとともに、ともすれば図式的・恣意的になりがちなメタファー分析を説得力あるものにしているといえよう。

次に科学的知識と他の知識との関係についての著者の考察を検討したい。科学的知識に対して著者は一貫して批判的であるが、その背後には、特定の知識の創造を担う人々と他の人々との相互関係や解釈過程の重要性を考慮した著者独自の知識モデルがある点が注目される。著者によれば、ある種の思考法とそれを担う人々は〈思考コミュニティ〉を形成しているという。これには閉鎖型と開放型の二つの類型があり、また〈思考コミュニティ〉相互の関係には〈翻訳モデル〉と〈交渉モデル〉という二つで代表できるパターンがあるという。科学者、健康教育の専門家、一般大衆の間の知識の創造・伝達を考えた場合、一般には、科学者のみが現実への特権的なアクセスを持つとみなされ、彼らによって創られた科学的知識が翻訳されて大衆に達するという知識モデルが支配的であるという（閉鎖ー翻訳モデル）。著者によれば、こうした科学と社会の関係の理解は、科学を超越的な位置に押し上げることで領域間の現実の権力関係を隠蔽し、翻訳にともなう「暴力」の可能性を無視するものであるという。実際には各領域はそれぞれの言語的象徴的システムを持ち、どの領域も特権的な現実へのアクセスを持っていないのであり、そうした思考コミュニティが相互に交渉しあう中で知識が創造ー伝達ー受容されていくのであるという（開放ー交渉モデル）。

エイズに関する様々な紛争の最終的な裁定者として科学的知識や科学的思考様式を認めることは、「科学的」と認定されたもの以外の思考法を「非科学」として排除すること、コミュニティの豊かな隠喩やヴァナキュラーを拒否することにつながる。しかしエイズの知識が意識変化や行動変化に結びつくためには、そうした隠喩や日常言語を介した解釈過程を考慮することが不可欠であり、また科学自身も常識や隠喩に深く浸透されたものである。クーンのパラダイム論の大衆普及版（科学革命と通常科学の発展を、ともに直線的な進歩の過程の中に収めてしまい、しかも科学者共同体の内部の事態とみなして社会との関連を無視する）によって補完された、科学の中立性・卓越性・客観性の神話は、科学知識もまた特定の文化的象徴の回りに生産されていることを見失わせ、科学と社会の間、科学と公共政策の間の関係を曖昧にする。そして承認された科学的論理の優越が、さらにセクシャリティの再組織化、再植民地化、医療官僚制への人々の依存を生み出していくと著者は考えているのである。それに対して〈開放ー交渉モデル〉を分析の基礎に置けば、特定の科学的知識・説明が妥当とみなされ、説得力を獲得するためには、科学の進歩（たとえばレトロ・ウイルスの発見など）という内

的要因のほかに、社会意識や社会状況といった外的要因と連動している必要があるという点が明確になる。例えばエイズ研究においては免疫学とウイルス学が指導的役割を果たしてきたが、両者の原理は根本的には両立不能なものであり、一方あるいは両方の一般的な影響力の獲得には社会状況が強い影響を及ぼしている、と著者は分析する。分析によると、六十年代以降からエイズ出現当初まで免疫学的説明が影響力をもったのは、同化イデオロギーから反抗的なマイノリティ集団の多元主義へとアメリカの社会意識が移行しつつあったことや、ベトナム戦争の敗北が強く作用した結果であるという。HIVの同定以後のウイルス学のヘゲモニー獲得は、政府当局や製薬会社や研究者にとってワクチン開発を最有力の治療法とみなすことのほうが、財政的・収益的・業績的に有利であったことや、エイズの複合的要因を理解するよりも、単一原因を設定することを好む一般的傾向が作用したとみなしている。

科学を社会から独立して存在する普遍的な方法であるとする立場を、社会の政治的・経済的価値体系に結びついた認識枠や権力関係に依存した、客観的でも中立でもないものとして科学を捉える立場から批判することは、今日の科学哲学においては特に新鮮な視角というわけではない。しかし「緊急事態」を免罪符に、八十五年前後から急速に高まった「エイズの脱ゲイ化」及びエイズ対策の科学化・中立化推進の要求の結果、科学の優越性が再強化されはじめた状況を考えると、最新の科学の政治性を緻密な分析を通して再確認することは新たな重要性を帯びているといえよう。

さて最後に言説と権力のテーマに目を向けてみよう。著者は、全章を通して権力と言語の関係へ注目することの重要性を主張している。ある言説空間の中で、その空間を支配する普遍的な言説規則によって存在しなくなってしまうような問題が間違いなく存在する。支配的言語表現が彼らの声を排除し、彼らの経験を構造化するやり方、支配的文化の権力が強制する表象へのアイデンティフィケーションを通して、抑圧的な関係に埋め込まれることを暴露、批判しなければならないという。こうした立場から著者は一部の社会運動の理論家が、集団に固有の言語を再構成し、既存のアイデンティティの否定と新たなアイデンティティ構築と抵抗の組織化の基軸にしようとしているのを評価する。しかし隠れた体系的抑圧に対決するために、他者から同定されうるアイデンティティを持つ集合体として集団を編成すると、メンバーシップの条件としての差異が実体化されたり、社会的に構成された抵抗の表現が超越的主観性に等置されたりして、周縁的個人の抹殺につながったり、他の諸集団との共闘の障害になったりする点に問題があるとする。以上をふまえ、著者が強調するのが、抵抗の言説自体が権力作動のより微妙な側面を支えていることを継続的に指摘する、〈脱構築〉戦略である。著者が唱える〈脱構築〉概念はかなり粗雑で、絶えず非本質化作業を行うことの重要性の表明以上のものではないが、ともかくこのような脱構築の例として、サイードの『オリエンタリズム』のアフリカ版ともいえる第四章「アフリカン・エイズの発明」を解説してみたい。

ポスト植民地時代のアフリカ国家の現状や、アフリカ人のセクシ

ャリティについての西洋の表象が、どのようにエイズ研究と政策を方向づけたかがここでの著者の分析の焦点である。表象は西洋人／アフリカ人の間に執拗に差異を標定しようとする傾向とアフリカを「危機に瀕した大陸」として構成しようとする傾向に貫かれているが、ここには現在の世界の権力構造と新植民地主義イデオロギー、アフリカを西洋の「他者」として位置づけようとする動機が反映しているという。病気は病原体にではなく、エスニックな差異と結びつけられ、アフリカ人と欧米人の差異の構築・維持に寄与する。アナル・セックス、性器の潰瘍、性器自体というように差異の根拠は移り変わっていくが、差異設定自体がやむことはない。そして明確に他者化されたアフリカは、現在の西洋の倫理的基準では決して許可されないようなワクチン試験実施の最適の対象として登場する。ワクチン開発による膨大な利益の獲得と製薬会社の責任回避を同時に可能にするこの計画は、「永遠の暗黒大陸」「貧困と自然災害によって破局に瀕した大陸」としてアフリカを表象することによって正当化されるのである。「慈悲深い医療科学」そして「文化に敏感な倫理」を装う西洋は、西洋産の疫学基準やひとりよがりの「文化的敏感さ」を一方的に押しつけ、アフリカ人には研究の理論的枠組みに影響を及ぼす機会も与えずに、こうした表象群を媒介にしてアフリカを再び侵略していくのだという。

言語／表象は中立的な道具ではなく、それをめぐって闘争が行われ、それによって社会が編成されていくものであるという認識から、著者はエイズの脱政治化／科学化に反対し、あくまで政治的領域に踏みとどまって絶えざる脱構築を続けねばならないと断言する。最終章に反復される、サイレンス（沈黙）＝死であり、またサイエンス（科学）＝死である、という言葉が著者の批判的構えを巧みに表現しているといえるだろう。

以上、エイズ対策とそれを枠づける権力関係、科学的知識が他の知識や援助政策に及ぼす影響、言説と権力という三つのテーマで、著者のエイズに対する思考の流れを粗描してみた。各テーマはエイズ問題の複数の中心に対応するとともに著者の方法論の要点にも対応しているとみなすことができる。エイズ問題は、単一原因による還元主義的説明や、言説・知識・権力の相互連関への洞察を欠いた思考では捉えきれない。各要素や各視角は孤立してではなく相互に依存し交錯することでのみ有効な成果をもたらすということ、少なくともこのことは本書により明白となる。

既存の社会運動の批判や医療科学の政治的側面の暴露を全面的に展開した本書に対し、ＡＳＯが果たしてきた積極的役割を過少評価している、あるいは社会的合意の獲得のための不可避的な妥協の意義すら認めぬ理想主義にすぎぬといった批判がありうるだろう。しかし、現時点でのエイズ理解・対策の問題点を論じたものとしては出色の文献の一つであることは間違いなく、エイズ研究の里程標として一読を薦めておきたい。